

## 民俗祭礼における憑坐(ヨリマシ)などについて

メモ:鉄本(2022.05.30)

「住吉祭礼図屏風」の説明パネルに“女兒(アハラヤ?)”という表記があり、その言葉に興味を湧き、学芸員の宇野さんにご教示頂いた資料を手掛かりに、民族祭礼における「祓の儀式」について調べてみました。

### 1. 憑坐(ヨリマシ)について

広辞苑によれば、ヨリマシとは、「神霊が取り付く人間。特に、祈禱師が神霊を招き寄せて乗り移らせたり託宣を告げさせたりするためにともなう霊媒としての女性や童子」とあります。また、「日本歴史大事典」の説明を要約すると次のようになる。童児の無垢、清浄さがヨリマシにふさわしく、清浄さ保持のために肩車や山車に乗せて土に触れさせないようにする。ヨリマシはシャーマニズム、神道、仏教、道教、修験道、陰陽道などが複雑に習合した日本の宗教風土において成立したもの。

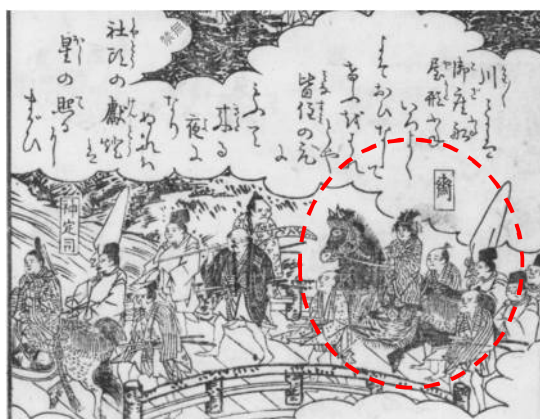
藤本武氏の論文によると、神霊が依り憑くものとして、「ヨリシロ(憑代)」と「ヨリマシ」の二者があり、御幣、樹木、石などに依り憑く場合を「憑代」、童児、童女など人間に依り憑く場合を「ヨリマシ」と紹介している。神霊が依り憑いているシロモノ(榊はその一つ)は、自然物、動植物、建造物、人物など多様であり、「神霊が内在」しているものとして、古代から信仰の対象であり人間の「穢れ」を浄化するものである。

### 2. ひとつもの(一つ物、一つ者)

祭礼には、特別な扮装をした童子や人形が登場する。派手な装束、被り物、化粧などの行粧で、肩車や騎馬に乗って神幸行列に加わる。西日本を中心に約50例が確認されている。平安後期の畿内の祭礼では、馬に乗って参列する童や舎人を馬長童(めちようわらわ or うまおさ)と言ひ、造花を腰に差し風流笠を被る様子が「年中行事絵巻」に描かれている。「一つ」には、一番という順序の意味があり、一番初めにお渡りする、一番目立つという意味もある。民俗学では憑坐・憑代と解釈されている。

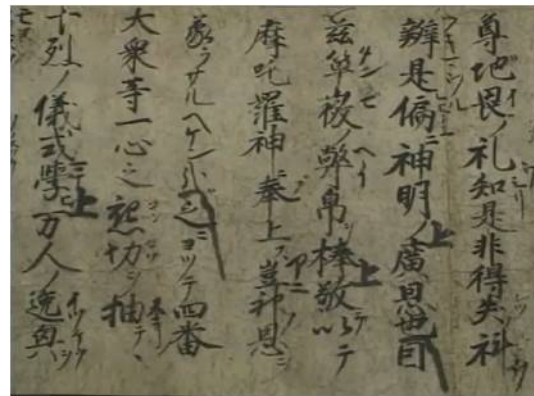
### 3. 阿波羅耶(アハラヤ)について

「住吉名勝図会」(荒和祓)には、神輿の渡御の場面で、櫃の前を進む「アハラヤ」という乗馬の稚児と列の5番目を行く「斎」とが描かれている。この二人の稚児はいずれも「ヨリマシ」とみられる。「ヨリマシ」には、神霊が憑依して託宣などを行うことを期待するものと、災厄などのマイナス要素を背負って放逐されるものという二種類が存在する。(左図:斎 右図:アハラヤ)



#### 4. 京都市登録無形民俗文化財「太秦牛祭」(広隆寺牛祭)について

右京区太秦の大避神社及び広隆寺で10月に行われる夜の祭事。神面をつけた摩多羅神(まだらしん)が牛に乗り、風流の行列を従えて、広隆寺客殿の庭から寺の周辺を練り歩き、薬師堂前に設けられた祭壇を3周し、壇上にて摩多羅神が祭文(さいもん)を読み上げる。参詣者は、祭文読誦(どくじゆ)の間、野次をとばすなど、行事の進行を妨げるのが恒例。祭文を読み終わると、四天王とともに堂内に突入するが、神面が厄除けになる言伝えがあり、群集があとを追って堂内に入り、その面を取り上げたという。



祭文の一部



風流の行列 牛に乗った摩多羅神



祭文の読み上げ、群集の野次

#### 【参考文献】

- ・「住吉名勝図会」(国文学研究資料館)
- ・「民俗儀礼の世界」 森隆男編 清文堂出版 2002
- ・「豊臣期大坂図屏風 住吉祭の行列」 黒田一充 関西大学学術リポジトリ 2009
- ・「祭礼を飾るもの 一つ物の成立と伝播」(要約) 福原敏男
- ・「風俗歌舞 祭が育む日本の音」 森田玲 建設コンサルタンツ協会誌 2019
- ・「民俗調査 ヒツモノ」 高砂市 2009
- ・「一神教の「シエキナ」と古代日本の「依り代」における「痛み」への考察」 藤本武  
新潟青陵大学紀要第4号 2004
- ・京都市登録無形民俗文化財「太秦牛祭」の記録映像 京都市 松竹京都映画株式会社 1998  
「京都の歴史と文化」映像のサイト:<https://www.kyobunka.or.jp/library/events/187.php>